

生産物編



生産物（タケノコ）と販売・流通の状況

自分の生産したタケノコが他の生産者と比べてどうなのか、また、他の生産者はどのように販売を行っているかを知ること、によりよいタケノコの栽培や販路拡大につながっていきます。

庄内地方地域3箇所の集荷施設において、2016年4月～6月に出荷されたタケノコの状況と販路について調査した事例を紹介します。

1. 集荷状況、販路（聞き取り調査）

(1) 事例1（K地区）

- ・集荷期間 : 4月23日～5月29日（期間中毎日）
- ・出荷者 : 75名
- ・期間中全集荷量 : 約49 t ・ピーク時集荷量 : 1日約3 t

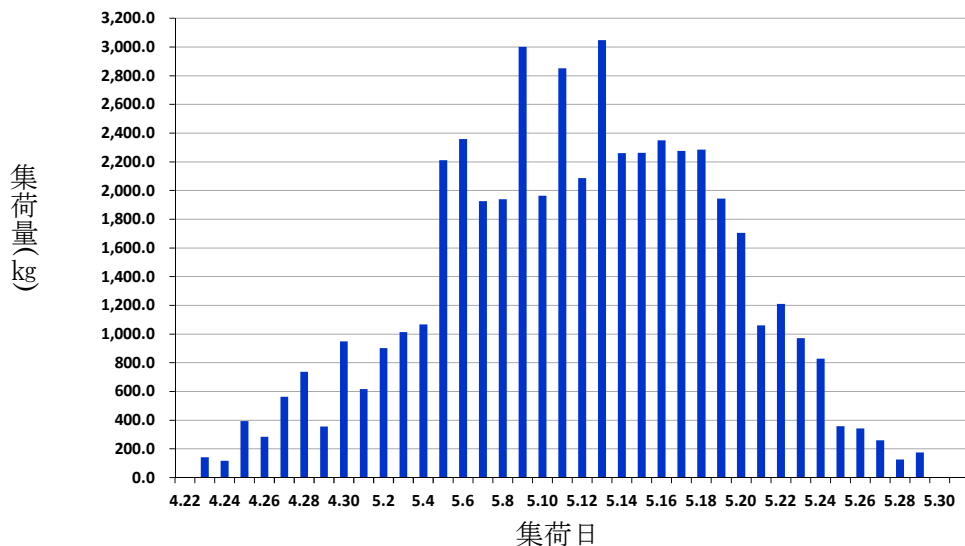


図10 集荷期間の集荷量

- ・集荷規格

生食用	L:1000g～ M:600～1000g S: 400～600g 2S:200～400g 3S:100～200g
加工用	A品（ロングと呼ぶ） B品

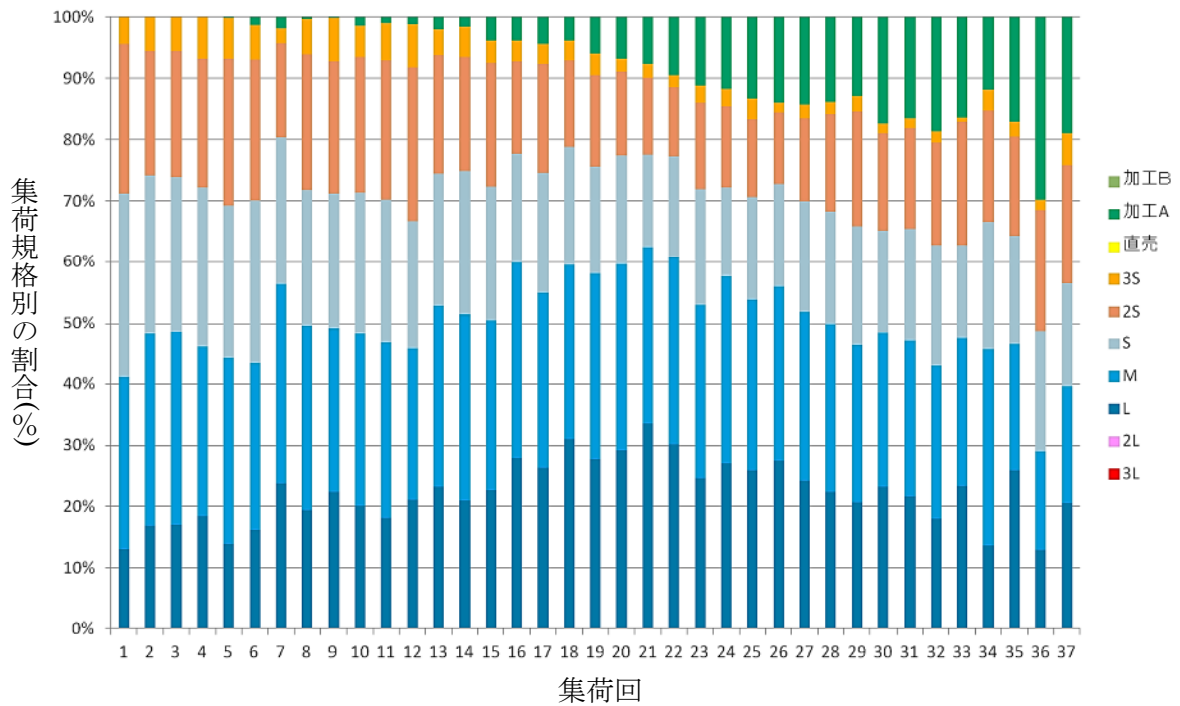


図 11 集荷品の規格別の割合

・特徴

- ① 2S・3S といった小さな規格がある
- ② 期間を通じて全ての規格がバランスよく出荷されている（図 11）

・販路

生食用の市場出荷が大半で，残りは缶詰を中心とした加工。
 （供給量の多さからロットが揃い，質も量も確保できるためと考えられます。）



写真 11 K 地区の生食用集荷状況



写真 12 K 地区の加工用集荷状況

(2) 事例 2 (S地区)

- ・ 集荷期間 : 4月28日～5月23日 (約3日に1回)
- ・ 出荷者 : 13名 (少人数で生産グループを結成)
- ・ 期間中全集荷量 : 約4t ・ ピーク時集荷量 : 1日約500kg

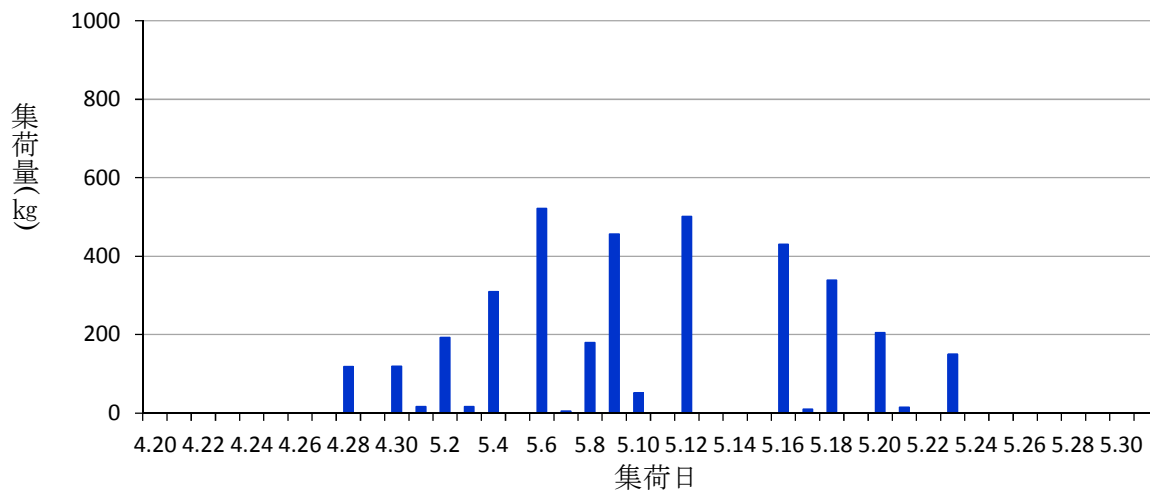


図 12 集荷期間の集荷量

- ・ 集荷規格

生食用	L:1000g～
	M:600～1000g
	S: 400～600g
加工用	
直売用	

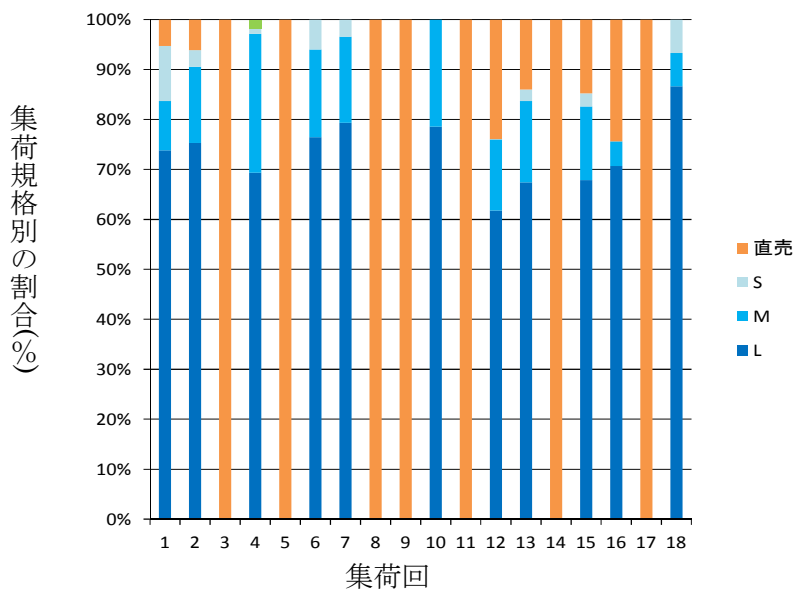


図 13 集荷品の規格別の割合

・特徴

- ① 直売の割合が高い（図 13）
- ② 良品出荷の意識が高く、「L」の規格割合が高い（図 13）
- ③ 地域ブランドの確立に向けて取り組んでいる

・販路

生食用の市場出荷，直売の他，スーパーと契約しての直接取引も実施。独自の販路開拓を行っています。



写真 13 S 地区の生食用集荷状況



写真 14 S 地区の直売状況

(3) 事例 3（F 地区）

- ・集荷期間 : 4 月 24 日～ 6 月 2 日（出始めは 3 日に 1 回，その後ほぼ毎日）
- ・出荷者 : 27 名
- ・期間中全集荷量 : 約 10 t ・ピーク時集荷量 : 1 日約 900 kg

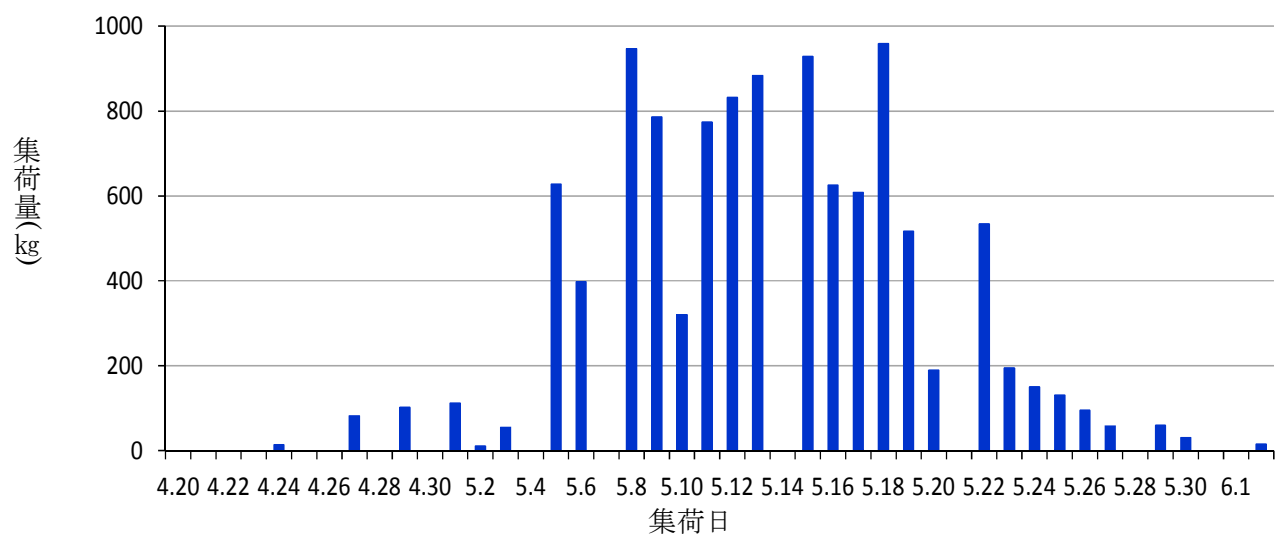


図 14 集荷期間の集荷量

- 集荷規格
 - 生食用
 - 3L:2000g～3000g
 - 2L:1500～2000g
 - L:1000～1500g
 - M:600～1000g
 - S: 400～600g
 - 2S:200～400g
 - 3S:100～200g
 - 加工用
 - A 品
 - B 品

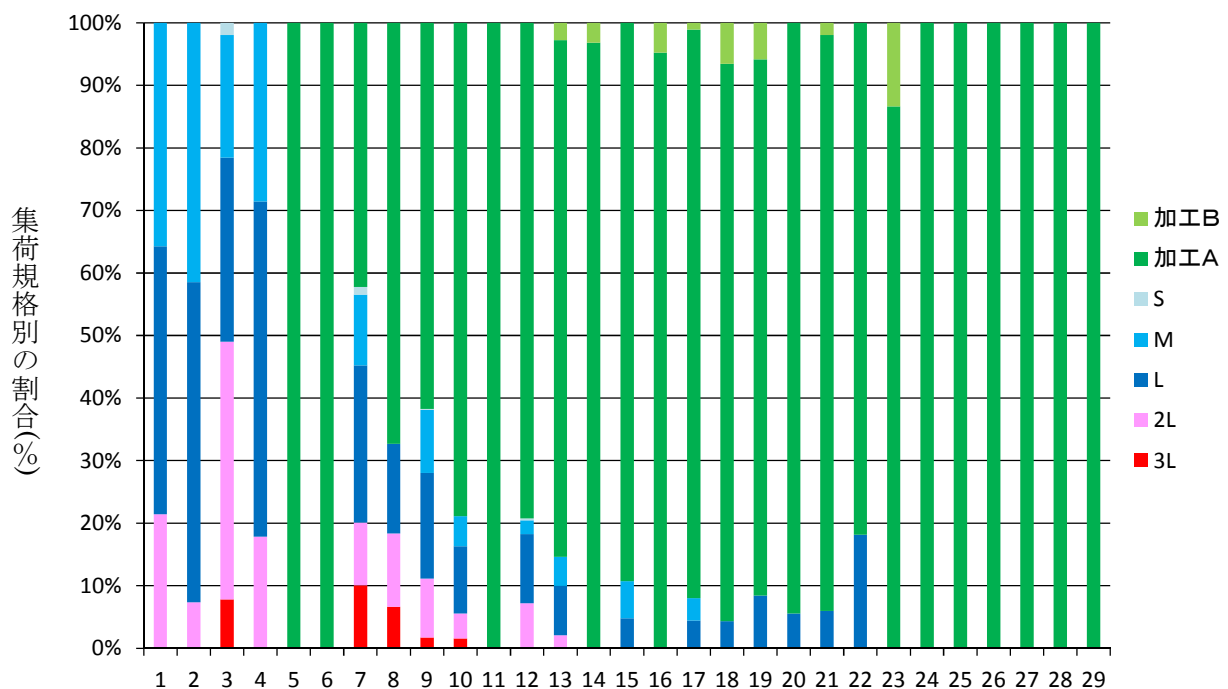


図 15 集荷品の規格別の割合

- 特徴
 - ② 3L, 2L といった大きなサイズの規格がある
 - ③ 最初は生食中心で、大きい規格のものが多く (図 15)
 - ③ 途中から加工用の割合が非常に高くなる (図 15)

- 販路
 - 加工用出荷が大半で、一部が生鮮市場出荷。
(集荷を始めた目的が、加工用タケノコの
需要によるものだったためと考えられます。)



写真 15 F 地区の集荷状況

2. 生産物（タケノコ）の状況

また，集荷物の重量および根元径を集荷期間中に複数回抽出調査し（写真 1，2），集荷規格（生食は重量による）毎に取りまとめ比較しました。



写真 16 重量測定



写真 17 根本径測定

生産物の根元径を規格毎，地域毎に整理したのが図 16 です。

データバーの上端が根本径の最大値，下端が最小値を表します。これを見ると，地域によって生産物のばらつきに大小があり，根元径の最大・最小・平均についても異なる傾向がみられました。これより，**栽培環境が非常に近い地域の中でも生産物の状況は大きく異なる**ことがわかります。

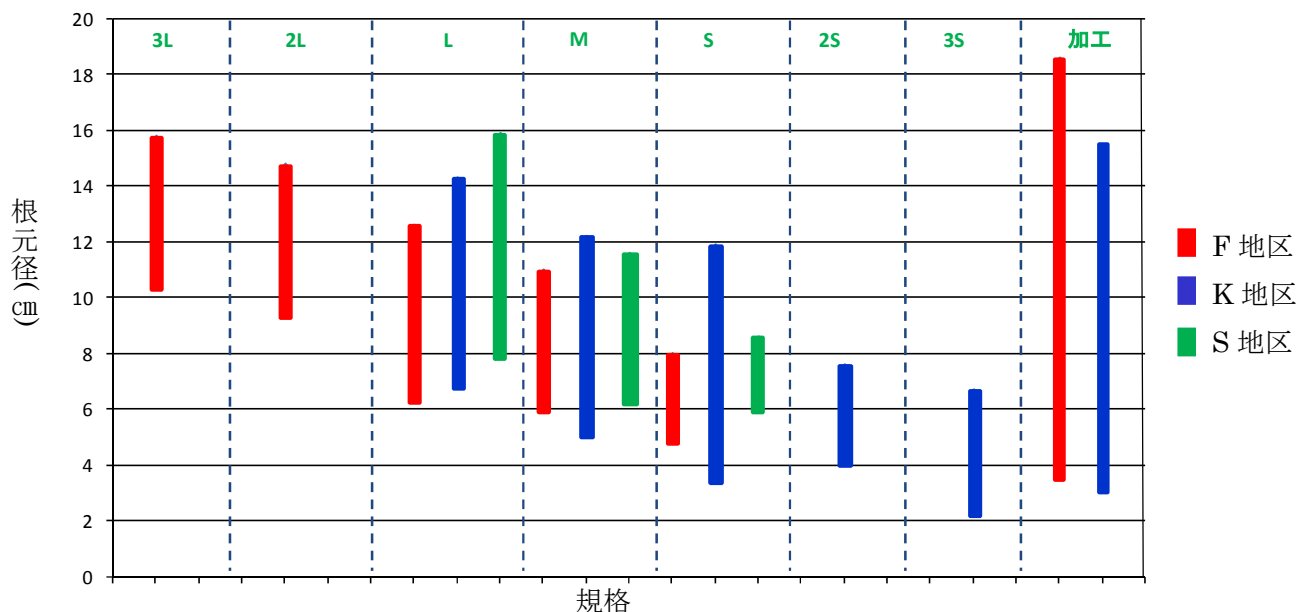


図 16 生産物の根本径の地域比較

これは，各地域における**集荷目的や販売戦略が異なっており，その目的や戦略に応じて集荷規格を定め，生産者はそれに沿うように栽培を行っている**ことが要因の 1 つと考えられます。

荒廃竹林復元編



荒廃竹林の状況

荒廃の度合いにより施業方法は限定される

近年、全国的に管理されていない竹林（以下、「荒廃竹林」と記載）が増加し大きな問題となっています。そこで、山形県における荒廃竹林がどのような状況かを把握するために調査を実施しました。

旧鶴岡市に4箇所の調査地（2m×10mの調査区を複数設置）を設け、折れ・倒れ竹の本数および立竹の本数を調査しました。

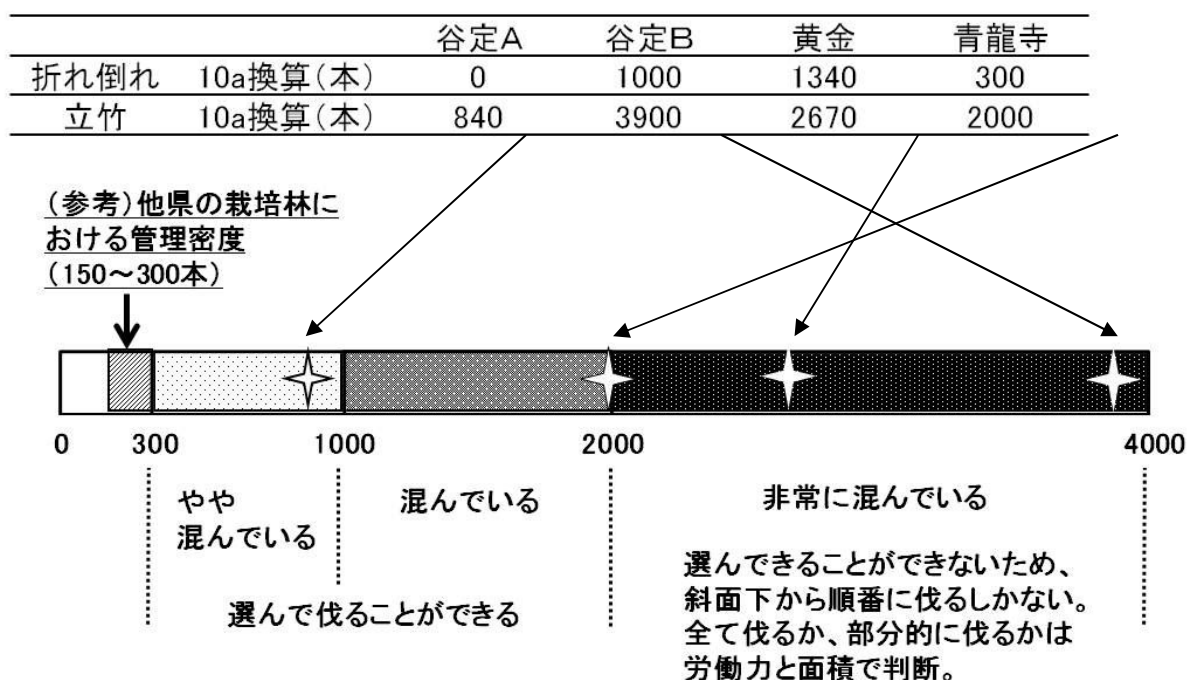


図 17 荒廃竹林調査結果と伐採方法の選択

これより、荒廃竹林の中にも様々な密度があり**荒廃の度合いの幅は非常に広い**ことがわかります。折れ倒れの本数は、荒廃の度合いが高くなるに従い多くなります。また、荒廃の度合いの大きい**密度 2000 本/10a 以上の竹林では、保残竹を選んで伐るのが困難であり、斜面の下から順番に伐るしかない状態**でした（図 17）。

栽培林への復元

一度管理できなくなり密度が非常に高くなった竹林について、再度管理をして栽培を行うことができないか という質問が寄せられたことから、荒廃竹林を一度伐採して栽培林に戻すことはできるか、また、そのために最も効率的な方法は何かを実際に伐採実証試験を行って調査しました。

1. 伐採実証試験の実施

伐採実証試験は、鶴岡市 3 箇所において実施しました。

① 谷定 A 試験地（抜き伐り試験：2013 伐採）

管理しなくなってからあまり時間がたっていない竹林（840 本/10a）。伐る竹を選ぶことができる。

② 青龍寺試験地（列状伐採試験：2 列を 2013 年に伐採。保残した 2 列を 2015 年に伐採）

荒廃が進んだ竹林（2000 本/10a）。選んで伐採できず、帯状に手前から順番に伐採。

③ 谷定 B 試験地（皆伐試験：2013 伐採）

荒廃がかなり進んだ竹林（3900 本/10a）。林内に入る事も難しく、伐る竹を選んで伐採できない状況。手前から順番に全ての竹を伐採。

伐採後は、収穫・間伐をせずに、新竹の発生本数および胸高直径を調査しました。

復元完了の判断は、8cm 以上の竹が年に 40 本更新されるかで行いました。

2. 復元状況の特徴

○谷定 A 試験地（抜き伐り試験）

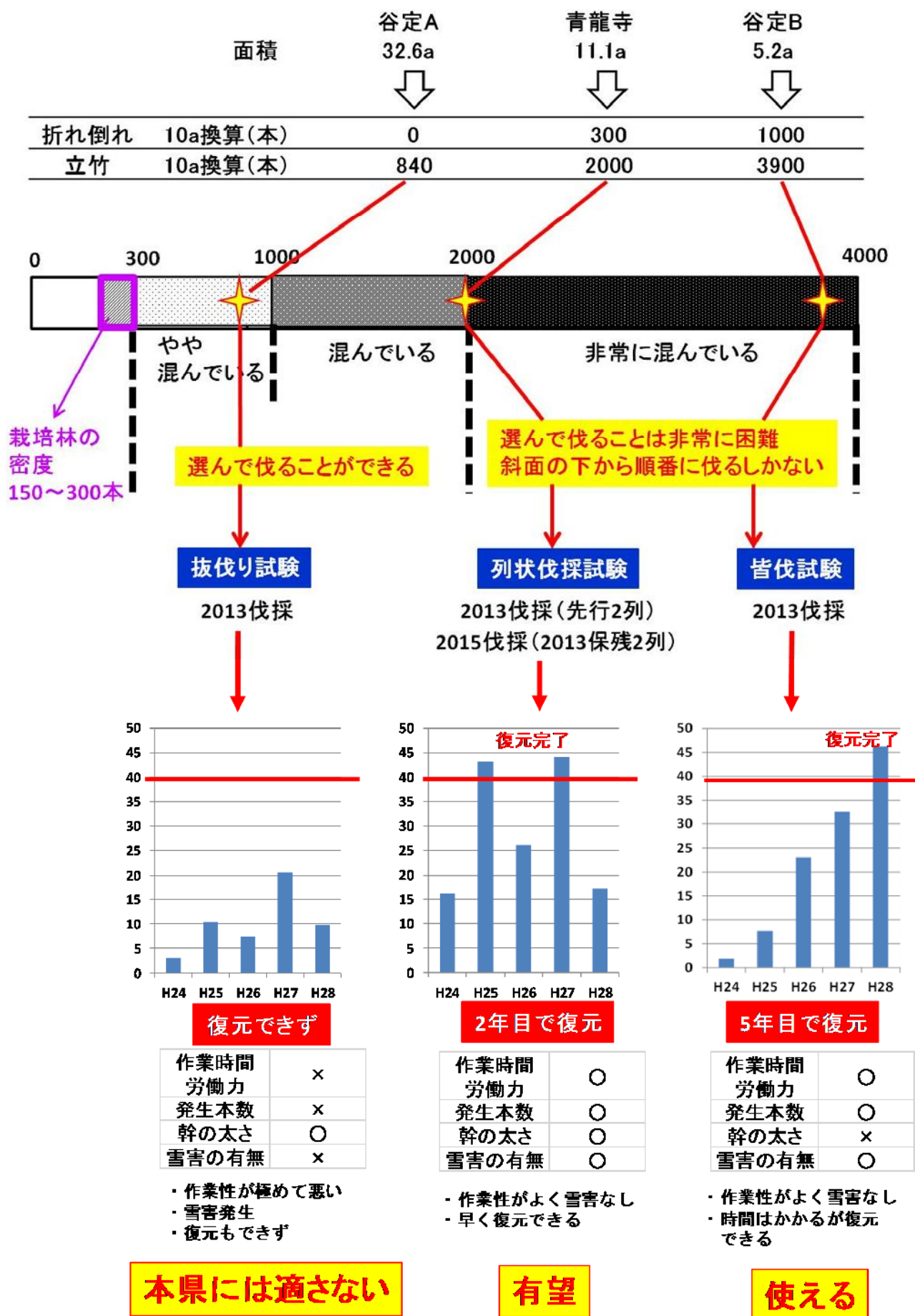
- ・太さはあるが、発生本数が非常に少ない
- ・ウラ止めが実施されていなかったため、**伐採翌年、保残した竹の 3 割が雪害**にあい
当初想定した理想的な親竹本数よりも減少
- ・伐採は**かかり木になり作業性が著しく悪い**

○青龍寺試験地（列状伐採試験）

- ・新竹の本数も十分あり伐採後 1 年目から太い幹が発生
- ・雪害はない
- ・手前から順に倒すため作業性は良い
- ・**保残列の伐採が早いと、新竹は一時的に細くなる**

○谷定 B 試験地（皆伐試験）

- ・幹を沢山出すが、伐採後約 2 年間は非常に細い
- ・雪害はない
- ・手前から順に倒すため作業性は良い



3. 作業，復元計画を進める上での注意点

伐採直後は「サバエ」と呼ばれる細い竹がでることがあります

伐採直後，新しい幹が再生する時に，「サバエ」と呼ばれる**ハウキ状（ササの様にも見えます）の竹が出てくる**ことがあります（写真 18）。これは，一度に多く伐採するなど，**竹林がダメージを受けた際に発生**します。これは**一時的なもので**，復元が進むとともに減少し，通常の太さの幹が出るようになります。

サバエも，光合成をして養分を作り出すため，**太い幹が出るようになるまでは，刈払いや伐採をせずに，サバエを残しておいてください**。太い幹が出るようになった時点で，処理することになります。



写真 18 サバエ

列状か皆伐かで迷ったら作業性（労働力）と幹の処理で判断を

前ページで，抜伐り，列状伐採，皆伐の詳細を示し，本県では列状伐採と皆伐が可能であると判断しました。

列状伐採か皆伐かで迷ったら，作業性と幹の処理方法から判断します。皆伐では，一度に大量の伐採が必要となり，労力が必要です。また，出てくる幹の量も多くなることから，どのように処理するかを考える必要があります。

作業可能な面積と本数か，幹の処理能力はどれくらいか検討し，可能な方法を選択してください。

※列状伐採時の注意

列状伐採といえども小面積の皆伐です。伐採面積が広すぎたり，保残した列の伐採（2回目以降）までの間隔が短い場合，上記の「サバエ」が発生することがあります。これは竹がダメージを受けている合図です。次の伐採面積を小さくする，次回伐採までの間隔を開けて様子を見るなどの対応をとってください。

判断がつかない場合は，森林研究研修センター，もしくは近くの総合支庁森林整備課にご相談ください。

おわりに

このマニュアルは暫定版として作成したものであり、今後、新たな調査結果や知見が得られた場合には、随時改訂していくものとします。

引用文献

- ・福岡県（2009）中小型タケノコ栽培手帳～時期ごとの管理について～
- ・日本特用林産振興会（2011）竹林管理マニュアル
- ・野中重之（2010）新特産シリーズ タケノコ 栽培・加工から竹材活用まで．159pp，社団法人農山漁村文化協会，東京．
- ・乙訓都市農業振興協議会（2003）京たけのこ栽培こよみ
- ・静岡県（1980）静岡県タケノコ栽培技術指針
- ・徳島県（2006）筍栽培 Q&A（改訂）
- ・上田弘一郎（1963）有用竹と筍－栽培の新技术－．314pp，株式会社博友社，東京．